

濱谷 巖先生

沖縄県立具志川高等学校 大隅 大 (Osumi, Dai)

2017年11月6日、後鰓類研究者の濱谷巖先生が逝去された。享年88だった。

先生のご逝去を悼み、先生との思い出をここに少し記しておきたい。

今から約30年前、私は高校の一生徒として、生物教諭の濱谷先生と出会った。その頃の私は先生がウミウシの分類で著名な方とは全く知らなかった。

濱谷先生は高校の授業の板書では漢字とカタカナを用いられた。ひらがなは書かない。早く書くための工夫だったと記憶している。私たち生徒もおもしろがってその真似をしたが、いつの間にかひらがなを使ってしまう。どうすれば、先生のように書くことできるのかと尋ねると、「慣れです」とさりと答えられた。先生は手紙ではひらがなを用いられたが、メモ書きは板書と同様に漢字とカタカナで書かれた(図1)。

先生の授業内容もおもしろかった。例えば、「発生」の分野の授業では、教科書に載るウニやカエルに留まらず、先生は自身で作成したプリントを用いて、ニワトリの発生まで教えられた。私の同級生は大学である授業がとても役に立ったと絶賛していた。また、当時印象的だったことは高校の事務の方が「濱谷先生は宮内庁から電話がかかってくるのでびっくりするよ。」と話されていたことだ。その頃、昭和天皇の後鰓類研究の御相談を受けられることもあったようだ。

濱谷先生は植物にも大変興味をもっておられ、牧野富太郎先生を敬愛されていた。濱谷先生は高校時代、毎週和泉葛城山に通われたそうで、その山の植物の名前はすべて分かったと話された。先生が採集された標本には今では見られない貴重な植物もあり、いくつかの収集物を博物館に寄贈されたとお聞きした。先生自身は大学進学時、シダ植物など興味のある生物を研究したいという志もあったそうだが、馬場菊太郎先生と出会い、ウミウシを研究することになったといつも笑って話してくれた。

濱谷先生は高校の部活動顧問として生物部を担当されていた。私はその生物部に入部した。私が入部する前の生物部は先生の

指導により全国大会で何度も発表をするほど活発な部であった。先生はそんな生物部の卒業生の方の話をいつも生き生きと私に語ってくれた。私自身も直接お世話になった先輩方も多い。例えば、濱谷先生から一番頼りにされていた森中敏行先輩や後鰓類の研究を続けられている中嶋康裕先輩、また宍道湖でお世話になった山室真澄先輩など多くの先輩方の頑張りを先生はいつも話された。先生からいただいた10月3日消印の最後の手紙は山室先輩の著作の紹介であったほどだ。先生はいつも卒業生の私たちのことを考えてくれていた。濱谷先生が研究者として大学ではなく、なぜ高校を選択して勤めたのか、私自身、高校教諭となった今、その理由をそんな先生の姿から感じることができる。

さて、私が入学したころの生物部は部員も少なく、それほど熱心に研究を続ける活動はなかった。ところが、ある日、濱谷先生から急に「春休み、与論島と奄美大島に行きませんか」と誘われ、宇田、村上両先輩とともに南の島に出かけたことがあった(図2)。当時の高校生物の教科書には「カサノリの核移植実験」が紹介されていたため、奄美大島でカサノリを初めて見た私は大興奮し、クラスメートに見せてあげようとひとかけらのサンゴ石につくカサノリをインスタントコーヒーの空き瓶に入れ、大阪に持ち帰った。登校途中、環状線の車内でカサノリってきれいだなあと眺めていると、ゆっくりと淵を這うウミウシに気づいた。その頃の私は濱谷先生がウミウシを研究されていることを知っていたので、先生に喜んでもらえるかと大変嬉しく感じ、先生の元に走った。生物室の前でばったり先生と出会い、ウミウシではないですかと慌てて先生に尋ねると、先生は予期せぬほど簡単に「新種ですね」と答えられた(図3)。

新種をもっと見つけたい、と私は大学への進路を濱谷先生に相談した。先生は生物学を勉強したいなら、フィールドの面白い北海道か沖縄がいいのではと勧められた。結局、私は先生の退職と同じ3月に高校を卒業し、沖縄の琉球大学に進学した。大学では、先生に紹介された弥益輝文先生の研究室に1年生からお邪魔し、海で後鰓類を採集しては写真撮影とスケッチをした上で標本をどしどし先生へ送った。その間、先生は根気強く私に海の生き物について教えてくださった(図4)。この当時、

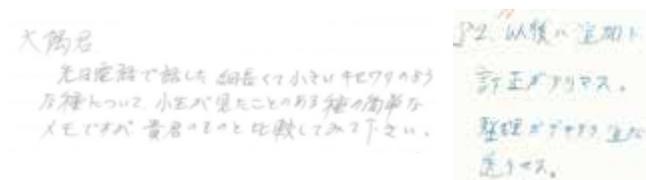


図1 濱谷先生直筆の手紙(左)とメモ書き(右)の一部。濱谷先生は手紙ではひらがなを使われたが、メモ書きはカタカナを用いられた。

濱谷 巖 (はまたに いわお)

略歴…1930年、東京都生まれ。元大阪教育大学附属高等学校教諭。大阪教育大学在学中に後鰓類の研究者であった馬場菊太郎博士に師事。後鰓類に関する数々の論文を発表。

主な著書…ウミウシの大研究「海の宝石」とよばれる生き物 生態のふしぎから珍種まで(PHP研究所)。『動物系統分類学』(中山書店)。『日本近海産貝類図鑑』『フィールド図鑑：海岸動物』(以上、東海大学出版会)。『海辺の生きもの』『サンゴ礁の生きもの』(以上、山と溪谷社)など、多くの図鑑・ガイドブックのウミウシ部分の執筆も手がける。



図2 生物部顧問の濱谷先生(左から2番目)。濱谷先生に南の海を案内していただいたおかげで、私たちは海への関心を高めることができた。



図3 カサノリタマナウミウシ *Mourgona osumi*.
タマナはキャベツのことだよと先生から教えられた。沖縄島にも本種は生息し、後に生態を観察した。



図5 フトガヤミノウミウシ *Cuthona yamasui* (上) とスミジメキヌハダウミウシ *Gymnodoris nigricolor* (下)。私たちが沖縄島で採集し送付したウミウシについても濱谷先生はいつも興味深く話してくれた。



図4 濱谷先生のアドバイス。濱谷先生の交流は広く、ウミウシについて、いずれの方に対しても丁寧に答えられた。拙い私のスケッチに対しても濱谷先生の根気強さがうかがえる（赤丸は先生のアドバイス）。

濱谷先生は、弥益先生の見つけられたウミウシや深海産のウミウシを記載するなど多くの論文を執筆され、ハゼにつくウミウシや弥益研究室の足立文先輩が研究されていたチドリミドリガイなどにも興味を持たれていた(図5)。



図6 濱谷先生(右)とパラオに旅立つ

私が大学1年生の時、再び濱谷先生から“夏休み、パラオに行きませんか”と誘われ、先生の付添という形で海洋バイオテクノロジー研究所の蒼玄丸に乗船した(図6)。先生が囊舌類のなかまを詳しく研究されている時は海藻のイワヅタ類から採集することが多かったそうで、パラオにおいてもその採集方法を試み、地下足袋を履き、バケツを持って海に出かけた。しか

し、その格好が地元の方から怪しまれたのだろうか、採集前に警察の車が現れ、先生とともに警察署に連れて行かれる事態となった。研究所の方の説明ですぐに海に戻ることができたが警察署内ではドキドキ感を味わった。しかし、その後採集したイワヅタ類から未記載種が見つかり、先生は蒼玄丸に献名し、*Sohgenia palauensis* (和名：ソウゲンウミウシ) と名付けられた。

私は先生の期待に応えることはできず、自分の気持ちの赴くまま、職を変え、生きてきた。かごしま水族館で勤務している頃も、先生は私を支えてくれた。私は当時同僚であった出羽慎一氏に錦江湾の魅力を教わり、その海の多くのウミウシを撮影、スケッチし、先生に送るという大学当時と同じことを継続していた。潜って泥を集め、泥の中から多くの後鰓類を採集した時も、その中の一種クロヒメキヌハダウミウシの形におもしろさを感じられ、先生自身のウミウシの系統についての考えを語られることもあった。

休暇で大阪に帰省すると、必ず濱谷先生宅にお邪魔し、昼からビールをご馳走していただくこともあり、先生の奥様(美和子さん)にも大変お世話になった。先生の家では鈴虫がたくさん飼育されている時期があったり、庭に実る果物を頂いたり、ハウスの中で育てたランを見せていただくこともあった。先生はいつも生きものに関心を持ち生活されていた。濱谷先生は大阪の海についてもよく話された。先生の頭の中に描かれる大阪の海は生き物の宝庫であったが、私の知る大阪の海は大阪港が中心であったため、いつも先生の描く大阪の海のイメージと重ならず残念に感じた。先生の紹介された大阪湾の生きものの中から、先生は大阪の海でたくさんの海岸生物と出会い、多くの発見があったのだと理解できた。先生の家では、貝塚市立自然遊学館の山田浩二さんと話したり、先生からきしわだ自然資料館の柏尾翔さんの話もお聞きしたりした。先生は最期まで海の生きものに関心を持ち続け、海に出かけ研究を続けられていたと、お二方から話を聞いた。

私は先生のウミウシへの研究の情熱を引き継ぐことができなかった。ただ、先生から教えていただいたいつも生徒のことを考える高校教諭像に近づけるようこれからも努力を続けていきたい。

ここに生前のご指導に心から感謝するとともに、哀悼の意を表し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。